
ノベレイト

鏡花水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノベレイト

【Nコード】

N1569W

【作者名】

鏡花水月

【あらすじ】

人々が物語を紡ぎながら生きている世界「ノベレイト」そこに住む少女・ミレイは引きこもりがちな鬱少女であった。だが、彼女を取り巻く人々によって、何かが変わる。泣きながら、躓きながら、一歩ずつ進んでいく少女が成長の過程で学び、思うこと。それは、周囲の人間も、少しずつ変えていく。希望の光へ進ませるために。

Prologue

この世界の文学史は、長い歴史を持つ。文学——所謂小説という、文字という記号が最小単位だが、その文字自体には、四千年、エジプト文明、エウフラテス文明、インダス文明、黄河文明の四大文明から始まる経常の歴史がある。そこから、世界最古の文学、「ギルガメシュ叙事詩」や、今や全世界で読まれる恋物語のベストセラー「源氏物語」、中世の名作「ロビンソン・クルーソー」や「オペラ座の怪人」。二十世紀に入ってから、「桜の園」や大正労働文学の代表作「蟹工船」がその名を人の心に刻みつけていった。その歴史の流れの中で人々は、「人が小説を書き、その為だけに生きている世界」、所謂別世界の存在を信じるようになった。最初に信じた者がその思想を述べた時、人々は

「そんな世界がある筈が無い」

と鼻先で笑った。だが、神はその人々の考えをも裏返した。西暦1901年。二十世紀の始まりの年、アメリカで一人行方不明者が出た。何故消えたのか。何処へ行ったのか知る者はいなかった。三十年の時を経て、その人は帰ってきた。そのときには、原因不明の行方不明者は世界の至るところ、特に当時と言う列強という国々には何百人も確認されていた。その中には、最初の人のように、生きて帰ってくるものもあれば、いつまでも失踪したままで、人々の記憶の中から露もいなくなってしまうものもいた。帰ってきたものたちから話を聞いたところ、彼らは小説を紡ぐがために在る世界「ノベレイト」へ転身していたらしい。ノベレイト、とは何か。どうやってその世界を知ったのか——などと続けざまに訊かれることはなく、皆失踪した折に頭をやられたのだろうと思われるだけであつた。だが、その中にも彼らの話に興味を示し、ノベレイトのことを訊いて、その世界を深く知って、遂にはノベレイトへ転身する者も現れた。2011年現在、ノベレイトの住人、約165万人也。

1・ノベレイトの住人

ミレイ・クヴェイティナ・アクアムーンは「ノベレイト」に住んでいる。華奢な体が纏うのは、黒い髪が肩まで縁をとる赤いカーデイガンに黒いリボン。膝を隠すか隠さないほどの長さを持つ、ベージュのスカート。顔立ちは白い肌に一点の曇りも無く鼻筋も通っていて、端正なものだが、二重の綺麗な形をした目は暗い影を落とされ、彼女が卑屈な性格であることを想像できる。

「テシンはそこから宙に浮いた岩を蹴って、普通では到底届きそうもない岩の上に乗った。そして……」

彼女の白く細い指が、本のページの上に万年筆を走らせる。ページには文字自体は書かれておらず、二十×二十のマス目が縦横に線走らせているだけだ。だが、彼女が文字を一つのマス目の上に乗書いた時、文字がそこに表記され、そのマス目だけ、区切りが消える。尤も、他の文字と隣接しているマス目の線に限るのだが。

「だが、キュアンはテシンについていけるかいけないかのギリギリだった……」

そこまでミレイが呟いた所で、指がひたと止まった。そして、目を伏せ俯き、ハアと溜め息を吐いた。

「どうしよう……この後の展開が全く思いつかないわ……」

と言って、これまで文字の羅列でページを埋め尽くしてきた本の山を振り仰いだ。

「私って、ダメだなあ。今まで、いくら書いても書いても読んでくれる人はたった数人しかないし。他人の小説に感想書いて送っても、全く言いたいこと言えてないし。何でこんな世界に来ちゃったんだろ？ 元の世界に戻ろうかな……でも、元の世界でもダメダメだったからノベレイト（こゝ）に来たのに……戻っても仕方ないわよね……」

ずっとブツブツ愚痴を垂れこぼしながらうなだれるミレイ。

現代医療で言う鬱なるものにかかっていたミレイは、生来の自己

嫌悪と卑屈さがあい混じり、社交性皆無、話術低能という、典型的な引きこもりの特徴を持っていた。

「やだよお、もう。死んで消えたい……」

鬱屈とした単語をつらつらと口から吐き出す。

「何で神様は私みたいな人間を作ったんだろ。生きる価値なんて私にはないのに」

と、言いつつも怖すぎてリストカットの一度もしようと思ったことはない。その意気地の無さにまた自己嫌悪に追い詰められているミレイの耳を、金属同士がぶつかり合ったような号音がつんざいた。
「~~~~っ!! サ、サリアスね、その音は!」

耳を塞ぎながら眉をあらん限り寄せて音のした方を向く。そこにいたのは、サリアス・クリアティス・フォームル。彼女の親友で、ミレイがノベレイトに来て初めての知り合いだった。

「もう、ちよつと目を離したらこれよ。何でアンタは死にたいとかそういう言葉がナチュラルに口から出るのかしらね?」

語調から読みとれる通り、サリアスはミレイと違って強気な性格で、とても社交的だ。

桜色の唇は強く尖り、切れ長の目に沿うように通る鼻。肌はミレイよりも健康的な色で、それを覆う袖が無いトレーナーとTシャツの重ね着に、短いGパンをという組み合わせ。ミレイが某名家の令嬢だとするならば、サリアスはおてんばで勝気な少女だった。

全く正反対の二人だが、何故か仲は良好である。今まさに、サリアスが何の前触れもなくミレイの家のドアを開け放ったことがその証拠だ。普通なら、ドアを叩くところを彼女はあたかも自分の家のように何の気なしに開けた。ミレイはそのことに関して言及はしない。したところで効果は薄いと知っているからだ。

「だって……書いても書いても誰も読んでくれないんだもん」

「あんた、最初はこれ以上筆が進まないって言って嘆いてなかったかしら」

「そこから聞いてたの!？」

メールは頷き返す。ミレイの性格上、サリアスが家を訪ねても雰囲気的に中に入れずに、二の足を踏むというのは多々ある話だ。

「しょうがないなあ……で、今日は何の用？」

ミレイが本を机の引き出しの中にしまい込むと、唐突に腕を掴まれた。

「え？」

「アンタを外に連れ出して来て欲しいっていう人がいるから連れ出しに来た。それだけよ」

「ええっ、でも私あまり外に出たくない……」

引っ張っていかうとするサリアスに、必至に抵抗するミレイ。余談ながら、サリアスもミレイ同様華奢な体つきだ。だが、彼女は並の男以上に力が強い。至極当然ながら、普段運動不足気味のミレイが勝てる相手ではない。

「ちょっとは陽の光を浴びなさい。モヤシ人間」

「わーっ！ やめて！」

ミレイは、さながら歯医者に無理矢理連れて行かされそうになる子供のようにメールに引きずられていった。

▼

あまり他人に顔がきかないミレイは、ノベレイトの殆どの人間と初対面だった。更に悪いことに輪をかけて、彼女は初対面の人間との会話を頑なに拒んでいた。サリアスでさえ、彼女が始めて口を聞いたのが出会って3ヶ月目という有様である。今日の前の噴水に座っている少年は、幸いなことに初対面ではない。

「はは、何だか無理矢理外に連れ出されたみたいだね」

少年は白い半袖のポロシャツに灰色のスラックスという、ニホンという国の高校生のような出で立ちだった。ミレイに引けをとらないくらい白い肌に、サラサラの髪。繊細な顔立ちの紅顔美少年だった。名前をイズミ・ヒメユキという。

イズミは少女のような顔立ちに苦笑を浮かべて言った。

「ミレイ、いきなりで悪いけど、頼みがあるんだ」

「私以外の人に頼んでよ」

ミレイは強制的に外に連れ出された為に、不機嫌になっている。暗い色の目を伏せ、更に暗い雰囲気醸し出している。

「それがダメなんだ。実はヒノムラさんに関わることでさ」

ナナミ・ヒノムラ。ミレイの数少ない知り合いである。

「え？ ナナミがどうしたの？」

「“人間失格”を見つけたとかわけのわからないことを言いだして、大変なんだよ」

『いつものことでしょう』

チェコ共和国にありそうな中世風の街並みで見事に協和音を響かせるサリアスとミレイの声。

「どうせ、オサム・ダザイの人間失格を見つけたとか言うんじゃないの？」

「それか、その盗作じゃない？ 前にも、某国の兵士がわけの分かんない正義を振りかざして女性の所持品を奪うっていう作品が盗作扱いでノベレイトの管理者から消されていたじゃない。リュウノスケ・アクタガワの羅生門の盗作だったかな。作者もノベレイト永久追放処分を受けたって聞いたわよ」

サリアスとミレイが順番に推測を述べる。だが、イズミは2回とも首を横に振った。

「ううん、そうじゃないらしいんだ」

「じゃあ何よ？ アタシさっさと帰りたいんだけど」

サリアスが早くもいらいらした様子で急かした。それに対し、イズミは

「……屋上で、首吊り自殺を試みた人を引き留めた、ってメッセー
ジに書いてあったよ」

ミレイの方が大きく、ビクンと跳ねた。

1・ノベレイトの住人（後書き）

ミレイ・クヴェイティナ・アクアムーン M e a l e y K u v e
i t i n a A q u a m o o n

サリアス・クリアティス フォームル S a r i a s C l e a r t
i c e F u m u r u

イズミ・ヒメユキ 姫雪出美

ナナミ・ヒノムラ 日野村奈々美

2・あの日、彼は――

“人間失格”

ノベレイトが創世されて47年後。即ち、西暦1948年に発表されたオサム・ダザイの小説。だが、ここでミレイ達の話題としての人間失格はその小説のことではない。

彼等がいるのは、町はずれの小さな赤い屋根の家。ナナミの家だ。「そうなんだよ。ボクが教会の懺悔室に来てみたらロープぶら下げて首を吊ろうとした人がいてさ」

一人称は「ボク」であるが、れっきとした女の子。それがナナミ・ヒノムラである。肩の上で切りそろえられた髪に、輪郭がはっきりした顔立ち。オレンジ色のシャツにGパンを履く、ボーイッシュという表現が適切な少女である。

「そこまでは信じる。ただ何故そこから人間失格に話が跳躍するのだ？」

冷静な面持ちで返したのはステイブ・ホワイト。ナナミの、所謂彼氏である。がっしりとも華奢ともならない体格に、癖のかかった金髪。そして、堀の深い顔に埋め込まれた碧眼。イズミ同様、整った顔をしている。あまり目立たないルックスのイズミと違い、界限の女の子に、そこそこ人気のあるステイブ。しかし、彼が選んだのは残念ながらナナミである。ナナミも、綺麗な顔をしているのだが、彼女には妄想と言う悪癖があった。今、人間失格と喚んでいるのがその証拠である。

「……い、いつもの妄想なんじゃない？」

ミレイが臍げに呟くと、ナナミはその決めつけはならんとばかりに身を乗り出し、猛烈な勢いで喋りはじめた。

「そうじゃないよっ！　ただ、引き留めた後にその人の顔を見たらお面みたいに感情が抜けてたんだ！」

「きゃあ!？」

ただでさえ気の弱いミレイ。彼女の腰を抜かすには十分すぎる勢いだった。

「ちょっと、アンタハイになりすぎよ。落ち着きなさい」

「ははは。でも、お面みたいに感情が抜けていた……太宰治みたいだね」

イズミが苦笑しながら言った。

「だよね？ イズミもそう思うよね？ ほら、賛成してくれる人がいたよ！」

イズミは苦笑半分、呆れ半分の微妙に引き攣った笑みを浮かべた。それは心なしか辟易していた。

「別に、君が正気であると思ってるわけじゃなくて……太宰治……は、説明しなくても分かるよね。『人間失格』や『走れメロス』とか。で、『人間失格』では自分のことを“道化師”と称していたんだ」

「道化師？」

「そう。自分が“他人と同じ感情を共有できない” 化け物であることを隠すための道化だと。尤も、太宰自身が本当にそうだったかは知らないけどね」

他人と同じ感情を共有できない、というのはどういうことなのだろう？ ミレイが首を捻っていると、ステイブが詳細な説明を述べた。

「空腹の感覚……それを主人公は理解できなかったそうだ。それだけではない。近しい者が死んでしまつて、周りは皆悲しいと感じているのに、自分は悲しいと思えなかったそうだ。他にも、周りが嬉しいと感じているのに自分だけ嬉しいと感じられなかったり……感情がない、というわけではなく、他者と同一の感情を抱けなかったそうだ」

「他者と同一の感情を抱けない……？」
ステイブの言葉を反芻したナナミに、イズミが説明を引き継いで答えた。

「そう。でも、それが明るみになると、自分は人外の化けものであると思われてしまう。それは避けたかったから、周囲に合わせて振舞う、仮面を作った。化け物である自分を隠すための道化師となつてね。でも、それで皆を騙しているという罪悪感がさらに主人公を苦しめたんだ」

「……そこまでして、人は生きていけるのかしら」
「生きていけなかった」

イズミが、陰鬱な表情で答えた。あたかも、「人間失格」の主人公を演じているかのよう。その表情を見た瞬間、ミレイは底の無い穴を永遠に落ちていく覚悟を落ちて行くときの感覚を感じた。

「人間失格の主人公は自殺して、物語は結末を迎えている。同時期に、太宰も本軸世界のニホンの玉川上水で当時の恋人と入水自殺したんだって。……話は飛び過ぎたけど、とりあえず感情を抱けないという面と自殺、という面から考えて、ナナミはその人を人間失格って言ったんだね？」

本軸世界、つまり元の世界の出来事であって、この、ノベレイトで起こったことではない。それに、50年以上も前の出来事だ。なのに、この話によってナナミの家の中の空気がプラス1トン程重くなった。ナナミはその根源であることの後悔から、悲しげな表情を顔に貼り付けて頷く。

「……ナナミ、その自殺未遂者はどこ」
常より幾らか鋭い剣幕を作ってサリアスがナナミに尋ねる。

「……ちよつと危なそうだったからさ、ジュピターさんのところに連れてきて監禁してあるよ。ジュピターさんは精神異常者と思ひ込んでるみたいだし」

ジュピター、とは本軸世界ではローマ神話の最高神。この世界でも、その名を借りてノベレイトを管理している、神と呼ばれる存在。本軸世界の人間がノベレイトへ転身を志望したとき、その転身を許可したり、ノベレイトで問題を起こした住人を本軸世界へ追放する……そんなことを毎日行っている。

だが、ナナミが気軽に訪れて人間を預けたところからみるとそう遠い存在ではないらしい。

「そう、妥当な選択ね。アタシ、ちょっとこれからジュピターのところへ行ってくるわ」

サリアスはそう言うなり立ち上がると、皆の次の言葉も聞かずにナナミの家を飛び出した。

「ああ、待ってよサリアス！」

ミレイが立ち上がって彼女の後を追う。だが、体力の無さも手伝ってか、すぐに力尽きてしまった。体を腰と膝の部分で折って、強く咳き込む。

「ミレイ……」

すぐ後から、イズミが追ってきた。

「走る必要はないよ。ジュピターの所へ行くのは分かっているんだから」

ミレイは、泣きそうな顔でコクリと頷いた。

3・走る戦慄

「ジュピター！」

宇宙空間の中に浮いた硝子の床。装飾の一つすらも無い。そこに、若い男性が立っていた。男性の名こそジュピター。ノベレイトの管理人である。裸身に纏った一枚の白い布。頭に王冠を被った姿は、さながらギリシャ神話の大神ゼウスのようであった。

彼の目の前には、一枚の宙に浮いたスクリーンがあり、先程彼の名を呼んだ少女の顔が映し出されている。――勿論、サリアスである。噴水広場に設置されたこの場所とノベレイトとを結ぶ通信機器の前に立つ彼女はジュピターに叫びかけた。因みに、彼が宇宙空間にいて食事その他諸々のことはどうなっているのか不明である。

「あ……どした？」

「前に、ナナミが来なかった？」

見た目とは裏腹に、気の抜けたニートのような声で応対するジュピターを、サリアスは気にする様子も無く訊いた。

「ナナミって……あの胸のデカイアイツか？」

男性の妄想を、倦怠的な表情を歪めずにさらりと言つてのけるジュピター。

「……その思いだし方は止めて変態神。で、来た？」

ナナミと同じ共通点を持つサリアスは不機嫌そうに眼を伏せると、焦りを見せた表情に戻し、再び訊いた。ジュピターは暫し考え込んだ。ナナミが最後に来たのは……昨日のこと。そう言えばその時……。

「ああ、来てた。何か変な奴も連れてたな」

瞬間的にサリアスの表情が強張った。

「……！ そいつに会わせて！」

「……どうした？」

「良いから！」

ジュピターは、首をかしげるとまあいいか、と言いたげに鼻から一息を吹き出して、右手の人差指を上方に突き出した。そこから、眼を瞑らんばかりの光が溢れる。

「コイツね……」

サリアスの目の前に現れた男性は、端正で穏やかな顔立ちをしていた。だが、その顔に彫り込まれた苦悩は大きいようで、暗く沈んだ表情だった。

「サリアス、その人を呼び出してどうする気なの？」

ようやく追いついたナナミが背後から訊ねる。その横にステイブが並んだ。怪訝そうな顔つきだ。サリアスは、息を切らしながら答えた。

「だめよ、コイツは……放っておいちゃだめ！」

「どうして！？　ボクの部屋にいる間、ずっとロープをかけて死のうとして、大変だったんだよ！　ジュピターさんの隣鬼に任せておいた方がいいじゃない！」

隣鬼りんき、とはジュピターがノベレイトで作り出した下僕のことだ。

ノベレイトの世界では、人間は小説を書く以外に仕事がない。他の、生活に必要な仕事をしているのが、隣鬼というわけだ。

「だめ、コイツはダメなの……隣鬼に預けたら、絶対ダメ！」

サリアスは、狂ったように、何かに取り憑かれたように、必至にナナミの提案を拒絶する。その後ろに、息を切らせて今にも倒れそうに肩を上下しているミレイと汗を幾筋かは垂らしているが、隣のミレイよりは大丈夫そうな状態のイズミが走ってきた。

ステイブが眉根を寄せてサリアスに問いかける。

「サリアス、どうした？　何故隣鬼に預けてはいけないんだ？　何か……心当たりでもあるのか？」

ステイブは、サリアスの古傷を抉る行為をしているという自覚があるからだろうか。最後の一言を身重に言った。それに対し、サリアスは悲しげに目を伏せ、黙りこむだけだ。恐らく、ステイブの問は合っているのだろう。

「ダメなのよ……燐鬼じゃ、助けてはくれない……」

その時、サリアスの前にいた男性がぼそりと呟いた。

「貴方ですか……私を、連れ出してくれたのは」

その声は、表情以上に起伏に欠け、機械のように、ただただ義務を全うしているだけのものだった。男性の顔は、ただただ暗いのではなく、感情が籠っていないのだった。

「……サリアス？」

ミレイが問いかけるが、サリアスは振り向きもしない。男性は、その横をひっそりと通り過ぎて行った。

「サリアス、何があったんだ？ 何が君をそこまで焦燥させるんだ？」

サリアスは、唇を噛んで動こうとしない。どう見ても、様子がおかしい。何かがあった————言わずもがな、ここにいる全員が悟る。今のサリアスは、さながら懺悔を行う囚人のような表情をしていた。イズミが、拉致が明かないと言いたげに男性に話を振った。

「えっと……失礼ですが、お名前を伺えますか？」

「私ですか？ ……イサム・フクオカです」

淡々と、テンションの上下もなく名乗る男性。ミレイは、恐怖、という感情を覚えた。

「福岡勇さん、か……太宰治の名前をなぞったんだろうな」

イズミの家。サリアスは、ナナミとステイプに連れられて暗い顔のまま帰宅し、男性はジュピターの元に戻された。後にはミレイとイズミだけが残された。イズミはダイニングテーブルの椅子に座ると、ミレイにも彼の向かい側に座るよう促して、この解説を始めた。

「え？ でも……共通点は治と勇、くらいじゃない？」

ミレイはイズミの言葉を理解しかねて訊いた。イズミは元々ニホン国で学生をしていた。太宰と同じ国に住んでいた為、イギリスに

住んでいたミレイよりはニホンについての知識はある。

「うん、勇は文字通り「治」を振ったもの……そして、苗字の福岡も「太宰」からとったんだろうね」

「え？」

福岡という単語の何処に太宰という単語の要素があるんだ、とミレイは訊ねようとした。だが、それを遮るようにイズミが解説を続ける。

「福岡、というのはニホン国の地名だよ。九州地方……って言うてもミレイには分からないかな。まあ、それはいいとして、福岡の中部……そこは今は筑豊と呼ばれているんだ。そこは、かつてニホンの都と同じ機能を持った政権が置かれていた。その政権の名前は……」

ミレイに、イズミに、一抹の沈黙が走る。一呼吸置いたのちに告げた。

「大宰府」

瞬間、今までにないほど強く、ミレイの心臓が大きく撥ねた。二秒と経たず、ある予想がつく。その予想は、ありふれていて、誰もが抱いてもおかしくはないだろう。

——フクオカさんは、オサム・ダザイなんじゃないの？　だが、ミレイはオサム・ダザイが半世紀程前に自殺したことを思い出してその予想を頭から追い出した。そんなミレイの予想を、イズミは見抜いていたのだろう。いきなり立ち上がって本棚まで歩いていくと、一冊の本を取り出し、振り返った。その拍子に前髪がさらりと揺れる。

「オサム・ダザイの写真だ」

彼は、ゆったりとした笑みを浮かべたままその本の表紙を捲った。そこには、若干老けた男性が、苦しげな表情をして、頬杖について顔をアップにした写真が載せてある。ダザイ本人の写真だ、とイズミは説明した。ミレイ達が、噴水広場で会った男性とは似ても似つかない。ということは、彼は人間失格に憧れ、わざと「周囲と同じ

感情を共有できない道化師^{ビエロ}」になっているのだろうか？ ミレイがその案を言うと、イズミは首をかしげた。

「分からない。でも、周囲と感情を共有できない、という病気はあるみたいだ。『協調拒否症候群』と呼ばれているみたいだね」

3・走る戦慄（後書き）

今回登場した「協調拒否症候群」は作者の創造です。実在はしません。

4・悲しみを彩って

イサム・フクオカという男性の出来事から、二週間が過ぎ去った。ミレイは、その事件をあまり思い出さないようにしていた。サリアスの、苦しそうな表情が、あのことを思い出す度に脳裏をよぎる――永遠に続く、懺悔の輪廻のように自分を束縛していく――そんな気がしたからだ。

「うう……書けないよ……」

だが、彼女の本質的な性格を変えない限り束縛され、苦しみを受けるのは変わらない。ミレイは椅子に行儀よく腰掛け、ぶつぶつと泣き言を唱えながら泣いていた。

「アンタねえ……」

「ははは……ミレイらしい、かな……」

サリアスは、困り果てた様な眼光をミレイに送り、イズミはベッドに腰掛け、プロットを組みながら苦笑いを浮かべている。もっとも、いつも意気地が無くめそめそしているのが彼女らしい、というのも問題はあるだろう。

「……だって、イズミみたいに書けないんだもん。私文才なんてないもん」

周囲の空気の硬度をあげそうな自虐的で陰鬱な台詞を、ミレイは口から止め処なく流していく。それを見かねたサリアスが、五本指を握り締めた右手を落とす。

「うわっ……痛いよ。何するのよ……」

「文才がない、だなんて自分で分かっているんなら、なんでアンタはこの世界に来たのよ。ここは、小説を書く人の為の世界でしょう」ミレイは、思わず口を尖らせてサリアスを睨んだ。だがしかし、目は泣いたことによって充血で赤く染まり、眉は悲しみによって八の字に歪んでいて、いまいち迫力に欠ける。

イズミはプロットを作製するための手帳を閉じるとベッドから立

ち上がり、ミレイの元まで歩いていくと、その頭に優しく手を置いた。

「最初は、誰だって下手だよ。才能なんてないんだ。皆、過去の積み重ねがあつて今があるんだよ」

瞬間、優しい瞳を注がれたミレイの頬が炎のように赤くなった。

「えっ……あつ、う、うん……」

生涯で一番狼狽したかのように、彼女は途切れ途切れに相槌の言葉を口から漏らす。サリアスは、どこかつまらなさそうな表情で二人を見ていた。

>i32646—1837<

「じゃあ、プロットも仕上がったことだし、僕は帰るよ」

ミレイの頬の色彩の変化は一切気にかけず、イズミは軽く手を振ると、少女の満悦感のみを伴って帰っていった。ミレイはまだ頬の赤みを残している。それは、サリアスの居心地の悪さを更に増幅させた。

「サリアスは、どうするの……？」

ミレイが言った一言に省略されていた動詞。帰るのか、と聞かれたが、サリアスはここに残ることにした。居心地が悪いことの元凶は過ぎ去っていったから、というのが大きい理由だろうか。

「アタシはもうちょっといるわ。だから、その間に最新話を書き上げなさい」

そう言って、彼女は近くにあった椅子を取り寄せてそれに座った。

「うん……優しくして、私に寄り添ってくれるのは嬉しいな」

ミレイは頬を綻ばせ、大きな瞳でサリアスを見上げた。途端に、出し抜かれたような、驚かされたような表情をサリアスは作る。

「勘違いしないでよね。アタシは、アンタに『死にたい』とか『才能がないからダメだ』なんて言っただけなのよ。本当に死なれたら、後始末とか大変なんだからね。別に、死にたいなら死んでも

いいのよ？　ただ、アタシ達に迷惑をかける結果に終わるのが落ち
だけど。ほら、文才がないんだからさっさと文章の練習でもしてい
なさい」

口から流れるサリアスの言葉が、徐々に棘の本数を増していく。
ただでさえメンタル面が弱いミレイは、それに耐えきれずに、段々
と眉を下げていく。

「……ほら、早く書きなさい」

サリアスに催促されて、ミレイはやっと万年筆を動かし始めた。
だが、時々しゃくりあげて鼻を吸いながら、目から零れ落ちる涙を
すくっている。

「……」

その作業を沈黙を破ることなく見守り続け、サリアスは日没まで
留まっていた。そして、帰ろうか、と腰を浮かせたところで、ミレ
イが万年筆を置いた。

「……できたよ」

そう言って、サリアスを見上げた彼女の顔は、本来なら泣いてい
る人間のものだ。だが、懸命に笑顔を作ろうとしているのだ。彼女
が、毒舌を吐きながら心の奥底では悩んでいるのを励まそうとして
「お疲れ様。じゃあね」

彼女は、それだけ言ってミレイの家を出た。残されたミレイは、
精神的に苦痛な物言いを聞かされたことによる落胆と、その言葉の
裏にある励行を糧に立ち上がると、よろよろと奥の部屋に入ってい
った。

ノベレイトで出回っている小説は、二種類ある。

一つは、二〜三万文字程度で構成されている短編小説。これは、
専用の道具でジュピターに申請すると、ノベレイトの中心の空間の
中に、その小説を設置できる制度である。^{システム}

もう一つは、五千文字から一万文字で構成される小説を幾つもつ
なげていく連載小説。これも、ノベレイトの中心で出回っている。

これらの小説をジュピターに申請する方法は、簡単だ。専用の道

具——直方体の物体に、蝶番で繋がれた天板。さながら、本軸世界で出回っている『スキャナー』という機械のようなもの——それに、書き上げた原稿を通し、彼まで送るといふものだ。その作業を終えて、ミレイは夕御飯として小さなお握りを数個ほど食べ、そのままベッドで眠りに就いた。

朝日という射手が、金色の矢を部屋の中に射てきて、ミレイはその野生本能を刺激され、深い眠りの底から引き揚げられた。

「ふあああ……」

少し、感傷的な気持ちから抜け出せただろうか。それとも昨日泣きはらしたからだろうか。涙が出てくる予兆はない。しかし、誰もいないと妙に寂しさを感じる。心に開いた隙間を埋めようと、外に出た。朝の陽ざしに照らされ焼かれた空気を胸一杯に吸い込み、何気なく郵便受けの中を覗くと、そこに見えたのは一通の封筒。

「あれ？ 感想かな？」

郵便受けに入る書類は、ジュピターやノベレイトの他の住人からの伝言、または小説を読んだものからの感想くらいものだ。そして、郵便受けに入っているものは、感想を入れるために使われる封筒に入っている。

「感想だ……っ！」

気持ちの高揚を抑え、封筒を掴んでその場で取り出して読んだ。好評を期待しているがゆえに、その手の動きは早く、しかしながら粗雑である。そして、件の感想を取り出して第一にミレイの視界に飛び込んできたのは

『レベルの低さが感じられました』

胸を抉るような、言葉の鏝だった。脳内を空白が埋め尽くす。高鳴っていた心臓の音が、耳に届かなくなった。

『思いつくままに書いているようですね。伏線が下手です。また、文法と語彙に少し問題があります。例えば、テシンの台詞。』「だか

「僕はどうすることだ」とありますが、これは理由を表すため……」
ざっと、こんな感じの添削の言葉が、便箋二枚に渡って羅列していた。

『恐らく、まだ始めたばかりの初心者でしょう。まだまだ上達の余地があります。頑張って下さい』

褒め言葉で括られていた感想だが、ミレイはそのフレーズすらも批判の色に染まっているような気がして、目を向けられなかった。圧力を失くした手が、二枚の便箋を空中に解き放った。便箋はさながら紅葉のように宙を舞い、虚無のみを見せつけるかのように、彼女の足元に落ちた。

「……何、これ……」

真っ向から、受け止められない。

「酷いよ……こんなの……」

その言葉は、残酷すぎる。十五歳の少女が背負うには無理があるだろう。

「面白く、ないって……文才がないって……そんなの、分かりきってるよ……」

喉の奥から微かに漏れる声で、ようやく誰とも知らない感想主に言い返す。

「何でよ……何で、皆……ううっ」

最後に漏れたのは、言葉ではなく嗚咽だった。

「うっ、ぐすっ……う、うわああんっ！」

取り残された子供のように、ミレイは声をあげて泣き続ける。指で瞳から流れ出る悲しみの衝動を拭い続けるが、拭った涙の道の後を、また別の涙が流れる。

「うう、うわああっ！」

ミレイは、声にならない叫びをあげながら便箋を手で丸めると、ポストに投げつけた。だが、虚しいまでに反力はない。

数十分後、慟哭を抑えた少女は立ち上がって、夢遊病者のように軸が揺れている足取りで庭の門出た。悲しみの余韻が、快々しく蒼

い尾を引いている。

「……っ」

涙は止まることを知らず、嗚咽も未だ喉から上がってくる。完全に、打ちひしがれた状態だ。無様とも言える状態だが、人目を憚ることなくミレイは街に出た。

本軸世界の欧州の国、チェコを再現した街に行く人は、ミレイの様子に気付くこともあれば気付かないこともあった。気付いた人は、彼女を肩越しに見ながら歩き去る。彼女の親類に大事でもあったのだろうと思っているようだ。

その人々の中に、彫刻のように佇んでいる男性がいた。ミレイの歩行ルート上に、その男性は位置していた。だが、ミレイは俯いて、視界を涙で濡らしているが故に気付くことはない。男性も、彼女が歩いてくると知っていながらよけることを考えない。

かくして、二人はぶつかることになる。

5・道化師の笑み

「うわっ」

「おっと……」

前方から衝撃を受け、ミレイの体は後方に軽く飛ばされた。

「すっ、すみま……」

泣いていたことを忘れ、謝ろうと顔をあげたとき、ミレイははつきりと見た。

眼前にあるのは、紛れもなく見覚えがある男性の顔。しかしながら、過去の記憶の中にはない顔だった。ミレイは戸惑いを覚えながらその顔を見る。男性は、彼女にぶつかられたのを気にすることなく、柔らかな表情を浮かべている。しかし本来、そこに表情は存在しない。

だが、それはミレイ自身の妄想だった。

「えっと……フクオカさん？」

「おや、クヴェイティナさんでしたか。久しぶりですね」

ミレイは、更に戸惑った。先日見かけたのは、あらゆる感情を失い苦しみ続ける道化師の顔をしたフクオカ。しかし、今のフクオカは感情を失っているようには見えない。

幻影だろうか？

困惑の最中にいるミレイに、フクオカは愛想良く話しかけてきた。「先日はご迷惑をおかけしました。私の悪癖が祟ったばかりに、貴方がたを巻き込んでしまって……」

「あっ、いやっ、その……き、気にしないで下さい。別に、そんな……」

年上の男性から深々と頭を下げられ、彼女は更に困惑した。自分も何か言わなければ失礼だ、と思い、慌てて喉を絞って、声を発する。

「えと、あのとき……何があったんですか……？」

「……」

フクオカは顔から柔和さを消し去った。前のような空っぽの顔ではないが、十分彼女の恐怖には値する。

自分は馬鹿だ。この言葉が彼女の脳内を掠めた。こんなこと訊くべきではないはずだ。フクオカさんは今も苦しんでいるかもしれないのに。だが、後方を流れる過去は取り戻せない。せめてできるのは、言葉の雨で埋め尽くすことだけ。

「あああ、いえっ、ちっ、違うんです。えと、その……ただ、何かあったか話したら楽になるんじゃないって……ええと、そういうことですっ」

手を胸の前に持ってきて振りながらそう弁解した。フクオカは、何も言わなかったが、数秒後に笑みを取り戻した。

「ははは、うろたえる様子が可愛いですね」

「へあっ……」

一瞬頬の火照りを感じたが、すぐに諫めた。男性に何かを言われる度に表情を変え続けるのは浅慮である。自分でそう思っているだけだが。

「いえね、たまに疲れから死にたい、と思うことがあるんですよ。

その時の私の表情は抜け殻のように見えるらしいんです」

というのはフクオカの弁。ミレイは合点がいった。何もかも隠している『人間失格』ではない。ちゃんとした、感情を持った人間であるのだ。そう、表面が整った面立ちの紳士であるように、中身も入っている。そして、整ったその顔が近づいてきた。

「な……何です……か？」

フクオカの顔は、ミレイの鼻先二センチの場所にある。彼は眉根に皺を寄せ、唇を尖らせてどこか訝しげな表情だ。自分の顔に何かあるのだろうか。そう思っていると、福岡は突発的に訊ねた。

「あの……つかぬことをお伺いしますが、泣いてらっしゃったのですか？」

「え」

その瞬間、自分がなんで街路を歩いて、彼とぶつかったのか思っただした。すると、今までなりを潜めていた筈の悲しみが、間欠泉から湧き出る水のように湧きあがってきた。

「いえ、目が充血しているので……ああ、すみません。私こそ要らぬことを聞いてしまいましたね」

その悲しみの跡を辿るように、涙が目玉を押し上げるように零れてきた。

「いえ、気にしないで下さい。何でもありません」

「しかし……」

「だ、から……大丈夫です……グスツ、何でも……うう……な、い……」

涙は、悲しみは、止まることを知らない。ミレイが指ですくっても、それは悠久に流れる大河のように、止め処なく流れ続ける。

>i33434—1837<

「お聞きしましょうか？ 話すだけでも随分楽になりますよ」

「いえ……いい、ですっ……ううっ」

嗚咽が喉から漏れ、着ているカーディガンが涙で湿っていく。幼げながらも端正な顔は悲しみに歪み、足が震えてバランスが徐々に狂っていく。

その後のことは、ミレイはよく覚えていない。ただ気付いたら、街の噴水広場の一角のベンチに座っていた。恐らく、フクオカが手を引いてくれたのだろう。そして断片的な記憶の自分は感想が云々などと喋っていたので、おそらくフクオカに一部始終を話していたに違いない。

「なるほどそういうことがあったんですか……失礼、件の感想を見せて頂けますか」

フクオカが掌を上差し出した。清潔感のある顔立ちと同じく、白く細い指だが、そこに病的さはない。寧ろ、輝かしく見える。

「……」

まだ涙と嗚咽が漏れる状態で、ミレイはカーディガンやスカートのポケットの中を漁る。すると、感想の紙が出てきた。投げ捨てた筈だが、無意識に拾い上げていたのだろう。未練がましい感情に、自分自身で嫌になる。捨ててしまえばいいのに。逃げて、何も問題は無いのに。心が拒むのと反対に、手はフクオカに感想の紙を渡す。

「どうも。……」

暫く、フクオカは黙り込んで読み耽っていた。

「……そう、ですね。私としても、こういう感想を受けたら戸惑います。ですが……」

一息、言葉を区切って、フクオカは語りだした。

「自信を持って下さい。感想主は、貴方の小説を好きでいますよ」「え？」

フクオカの宣告は、彼女にとって思いがけないものだった。言葉一つ一つが氷柱つららのように鋭く冷たく尖っていて、温情の片鱗すらもないメッセージを送りつけてくるような人が、自分の小説を好きでいてくれるわけがない。そう、彼女は思っていた。

「そっ……そんなこと、ないで……す……。私、文章なんてうまく書けないし、言いたいことが伝わるのかはつきりしなくて……」

反論している内に、彼に何を言いたいか自分ですらはつきりしなくなってきた。相手から見れば、自分はわけの分からないことを喚いているに違いないだろう。だが、フクオカはそれにめげることはない。

「批判する、というのはそれを愛している証拠です。好きでいるから、今以上に好きになりたい。だから添削までして、自分が好きになれない部分を好きになれるように改善を施すんです。皆、貴方のことを励ましています」

「……本当？」

理屈が伝わったかは分からない。だが、十分な励ましにはなった。

涙は乾き始めて、嗚咽は喉の奥で完全に鳴りを潜めた。

「ええ。ですから、泣くのはもうやめに……していますね。ハハハ」
フクオカの軽快な笑い声が響く。ミレイはもう一度、フクオカから感想を受け取るとそれを読み返した。

「言われたことを直せば……上手になれるのかな」

「この人の言っていることだけが正しいわけではありませんが、添削して下さったことを、逃げずに受け止めていればいつか傑作を書けます。貴方が望んでいた結末でね」

フクオカの後押しもあり、ミレイは自身を勇気づけることができました。自分の悪い点がありありと書かれるのは辛い。しかし、批判にまみれた文章を。彼女はもとより大きな眼を更に大きく見開いて何度も読み返す。フクオカは、これ以上いると彼女の邪魔になると思ったのだろうか。静かにベンチを立て立ち去った。

そして、数時間後。陽はミレイの丁度頭上にあり、気温も右肩上がりで上昇している最中だった。ミレイは後から声をかけられた。

「ミレイ、アンタどこに行ってたのよ」

「えっ？」

思わず感想の紙から目を離して後方を見やった。すると、頭の片方で結ばれた髪の毛と豊満な胸、更に広く晒された血色の良い脚が見えた。整った気の強そうな細面を見て、ミレイは目の前の人物の名前を呼んだ。

「……サリアス？」

「家に行ってみたらドアが開いてるのにアンタの姿が見えないから探しにきたの。でかけるんなら、せめて鍵ぐらいはかけておきなさいよ」

サリアスはそう言うのと、ミレイの返事を待つことも無く手を引いた。

「あっ、ちょっと……」

「何？ 文句か帰りたくない理由でもあるなら聞くわよ」

サリアスは、表面上は害の無いように取り繕っている。しかし、

強気で反発したら男でも殴り倒されそうだ。

「ううん、何でもないわよ」

そう言って返事をする、手を繋ぎながらもしかし、引きずられることもなくミレイは歩き出した。

イサム・フクオカという男性に会った。そう言ったらサリアスはどんな顔をするだろう。

彼女のあの顔が、常の気丈さを失くして苦しみに満ちたあの顔が、視界を蹂躪する。サリアスの横顔を見る。不機嫌そうに唇を尖らせたその顔から、あの表情の片鱗が見え隠れしていた。

助きたい。何としてでも知りたい。

でも、泣いてばかりの自分では助けることは難しい。

胸の内に、始めて悔しいという感情が芽生えた。劣等感^{コンプレックス}を必至に押さえながら、帰路を歩きゆく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1569w/>

ノベレイト

2011年10月23日03時21分発行